

# 『高慢』の魔女

めーりん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『高慢』の魔女。大罪の魔女の統括者がいたらな、と言う妄想。

※作者はWeb版の知識しか持っていません。

追記・訂正：書籍版も読み始めました。

# 目次

高慢の魔女	1
会遇と会遇	5
ちよつとした攻防	13
三人	17
『名前』	21

## 高慢の魔女

「あれ？おかしいな、おかしいね、おかしいよ」

その少女は、パチリと目を覚ました。暗い洞窟の中、ポツンと水滴が落ち、その音が反響する。

そしてパチパチと目を瞬いた。

「ううん……消えてる。消えてるな、消えてるよ」

たおやかな茶髪。景色を映す黒い瞳。ありがちな要素で構成されたその顔を不思議そうに歪め、少女は棺から這い出ながらうなる。

「違う。違うな。違うかな。『変わってる』のか。変わってるよ、変わってるのさ……うん？一つだけ、ある？ある？ある、ある。けど……—ああ、悲しい、悲しいな、悲しいよ」

そして完全に体を湿った外気に晒し、少女は笑んだ。

「まあ、いいか。いいな、いいよ。だって世界は僕がいなきや回らない。回せない。回さない。わかってた、わかってる、分かったの」  
ふるふると体を揺らし、おかしそうに笑って彼女は呟く。

「ううん？違う？違うって？そんなわけないって？」

——いいや、正しい。僕なら正しい。僕だから正しい。そう思うことはなんの奇妙さもない。ないのさ。ないよ」

そして、少女は目の前に広がる大海原を見据えて叫んだ。甲高く、強く、ハッキリと、そしてどこまでも高らかに。

「——だって、僕は『高慢』の魔女！『大罪』の統括者！だから『高慢』であって！『高慢』になって！どこまでも『高慢』であり続ける！」

そしてひとしきり叫んだ後、少女は、『高慢』の魔女はゆっくりと眼下の海へと体を倒す。その顔は先程の笑みなど消え去り、完璧な仮面に隠されていた。そして、体が落ちる。

呆気なく魔女の体は重力に従い、瞬く間に鉛直下方向へと加速を始める。

迫る景色。耳元で唸る業風。爆発したかのような耳鳴り。普通ならば肉体が恐怖で失神してもおかしくないその道中。ポツリと魔女

の口から溢れるそれは、

「そう、僕は絶対なんですから」

その眩きが木霊し、そしてその時を持って世界の理が変革される。それは呆気なく書き換えられた。まるで黒の絵の具を上からかけるように。まるで物を拾うように。まるで紙を破くように。

——世界に、最後の魔女が放たれた。



『高慢』とは何か。

それは『傲慢』ではない。それは似て非なる物だ。

それは『嫉妬』ではない。それは決して違う。

それは『憤怒』ではない。それは結果だ。

それは『怠惰』ではない。それは原因だ。

それは『暴食』ではない。それは末路だ。

それは『色欲』ではない。それは破滅だ。

それは『強欲』ではない。それは未練だ。

彼女は部屋で。ただ塗り潰された暗闇で包まれた部屋で。

魔女は笑う。

「そう。それらは一つの形でしかない。ないのです。ないんだ。傲慢も、強欲も、色欲も、暴食も、怠惰も、憤怒も、嫉妬も——全てがです」

問う。ならば『高慢』とは何か。

「それは——乙女の秘密です……なんちゃって」

人差し指を唇へ。どこまでも艶やかに。心揺れるほど清く正しく。突き詰めれば突き詰めるほど魔女に反するその行為は、いつ見ても酷く歪で。

だから今日も忘れず、彼女は仮面を被る。

——それは『高慢』足る為に。



人だかりが出来ていた。それはある都市の通りのど真ん中。行き交う人々の目を集めながら、少女はコインをくるくる回す。

「——はい、ここに一つのコインがあります。これをこうして……こうすると——はい！」

「おおー!」「すっげー!」「どうやってんの?!」

少女の手元からコインは消え、なにもない手を子供達に見せる。大人はそれをほほえまじげに見守りながら行き交いをしていた。どうも皆が訝しげに感じないのには、少女と子供達の外見年齢が全く同じなところにあるのだろう。

「ご好評のようで何よりです……よろしければですが、もう一度お見せしましょうか?」

お茶目な……まあ言うなれば、他人に好かれようとする意思が表層に現れ、形作られたその行為の端々。まさにそれは欠点を欠片も上澄みに浮かばせる事なく、ただ『綺麗な部分』のみを相手に押し付ける演技だ。機微な人間ならすぐ気がつくであろう違い。だがそれらは幼気な幼子達にはいたく気に入る類いのものであった。

子供達は微塵も表層を、確かに見えるそれを疑わない。

他人を疑うのは正しいが、それが常に良いこととは限らないのだから。そしてつまり、例えそれが間違いであっても彼ら彼女らを責めることは私達には出来ないだろう。

「もっかい!もっかい!」

「やり方とかないんですか?!」

「知りたいです！」

「教えてください！」

そして少女は微笑んだ。

「——ふふ、それは乙女の秘密です」

今日も彼女は、仮面を被る。

## 会遇と会遇

彼女は笑む。醜悪に。僭越に。酷薄に。

己を生んだこの世界を。己を許容したこの星を。そして——ありとあらゆる生命を。

「何故か？何で？どうして？そんな事を疑問に思うのはおかしいです、おかしいよ。おかしいね」

彼女はふらふらと足を空へと投げ出す。座るのは在りもしない椅子。響くのは揺れる言の葉。

そして、確かに在るのはその景色で。

「——ああ、度しがたい。度しがたいね、度しがたいよ。知れば知るほど、知っても知っても、君がしたことは、したいことは分からない。分からないのさ。分からなくなる。分からないのは——そう、分からなくていいんですよ」

彼女は呟く。

「まあどうでもいい。いいのさ、いいよ。僕は『高慢』。見下す者。見下ろす者。見上げるヒト。」

——さあ。僕は僕だと、刻み付けましょう」

そして魔女は、姿を消した。



——白鯨討伐。その偉業を成し遂げた一団の、王都に向かう竜車の中。

レムはボンヤリと窓から差す光を見つめていた。頭に浮かぶのは、レムのたった一人の英雄のことばかり。

「浮かない顔だな、レム。やはり、心配は尽きないか」

「……クルシユ様」

声を掛けられて隣を見れば、レムのすぐ脇に腰を下ろすクルシユの姿がある。

軽装の下に見え隠れする包帯は、その決して小さくはない負傷をひ



しひしと伝えてくる。全くそれを感じさせることのない動きは流石の一言だが、心配する者も少なくない。それ故、王都が見える地点まではレムと同乗する取り決めになっているのだ。

レムの視線を受け、クルシユは健在を示すように肩をすくめ、「それより」とこちらへ軽く顎をしゃくると、

「ヴィルヘルムとフェリス。同行した討伐隊の勇士も精鋭だ。リカードラ傭兵団の手助けもあろうし……なにより、アナスタシア・ホーシオンがその程度のことには気が回らないとも考え難い。相手の戦力は不安要素だが、負ける要素は感じられない」

「それでも、心配だっと思うのは身勝手なんでしょうか」

「不安の種はいくら潰しても尽きぬものだ。それが己を起因とするものであるのなら、自らを研鑽するなり開き直るなりでどうとでもなるだろう。だが、相手方あつてのこととなるとそれも難しい。——気休めを言うのは得意ではない。許せ」

顔に落ちる影を深めるレムに、クルシユは己の失言を悟り視線を沈ませた。途端、それまで王たらんと超然としていた様相から急に格式ばったところが抜けたように思えて、レムは思わず小さく口元を微笑の形にゆるめてしまう。

その微笑みを目に入れ、クルシユは「うむ、それでいい」と満足げに頷く。

「ナツキ・スバルも言っていた。レムには笑顔の方が似合う、とな。傍から聞けばとんだ惚気話と思ったものだが、存外馬鹿にしたものでもない」

「クルシユ様は……笑われると印象が変わりますね。普段は凜としていらつしやるのに、そうして微笑まれているとまるで……」

「たまに言われることであるし、気にもしている。だからあまり人前で不用意に笑えないのだな。ますます、無愛想な女が出来上がることになる」

クルシユ流の冗談なのだろうかと迷い、視線をさ迷わせる最中、クルシユの口元が軽く弧を描いているのを見つけ、思わずレムも微笑んでしまう。

勇猛果敢で凜とした、強い女性の見本足るクルシュ。いつもおどどと一歩引いたラインでしか動くことの出来ないレムには、それほども輝いて見えるのだ。

当然、理想の女性像を問われれば姉なのだけけれど。

「向かう先に待つのには魔女教。……エミリアの素姓を知ったときから予想されていたことではあるが、実態の見えない集団が相手となれば警戒は必須だ。ナツキ・スバルもそうだが、メイザース卿もなにかの対策はしているはずだろう?」

「主の考えの深淵まで、レムも知り得ているわけではありませんので。聞き出そうとしても、口には出せませんよ?」

「手厳しいな。今は同盟相手なのだから、少しは口を滑らせてもいいというのに」

レムの考えが暗い方へ、ダメな方へ向かわないように話を振ってくれているのだろう。現にレムはほとんど嫌な事を考えることなくこの時間を、クルシュの話を聞き、竜車に揺られ過ごしていた。

クルシュの言い分はもつともで、ロズワールならば此度の一件に対する善後策はなにか用意しているはずに違いない。スバルの行動は主のそれを助ける形になり、そして名誉は瞬く間に回復する。

いや、白鯨討伐の偉業は、地の底まで落ちたスバルの名誉を遥か上へと押し上げるだろう。

——英雄ナツキ・スバル。

それは彼によって心救われたレムにとって当然の評価であり、今後彼が瞬く間に打ち立てていくだろう輝かしい結果の正当な評価に他ならない。

そしてその輝きの傍らに、ふと彼が自分を思い出した時に微笑み合うことが出る位置に己の存在があれば、それ以上のことをレムはなにも求めない。それだけでレムは満たされる。

スバルのことを思うとき、レムの心はいつも奇妙な感情に満たされるのだ。

甘く、ツンと酸っぱく。不安だと思えば、どこか優しく。

そんな風にレムの心に一喜一憂を絶えず与えてくれるのも、スバルだけなのだ。

口元に微笑を刻み、レムは彼との未来を想像し目元を緩ませる。

その穏やかな横顔に安堵を得たのか、クルシユも腰の鞆に触れながら、無言で竜車の行く先を真っ直ぐ見つめ——王都への道程へ思考を廻らせる。

その時だった。

「——む？」

「——？」

クルシユが目を細め小さくうなるのと、レムが何か擦れる様な音を聞きつけてふつ、と顔を上げたのはほとんど同時のことだった。

クルシユの瞳が捉えた違和感は前方の竜車。そしてレムが聞きつけた異音もまたそちらの方から届いた。そして、直ぐにそれは起る。

——クルシユの視界の中で、前方の竜車が崩れ去っていた。それを同時に、レムは豪雨の様な音として認識していた。

血霧が噴き上がり、竜車が突如として悲惨な藻屑と変わる。

地竜も、竜車も、その中にいた負傷者たちも、一つも逃れることなど許されず、前方から粉微塵に粉碎されていた。

「——ッ！ 敵襲!!」

突然の事態に喉を鳴らすのが、それは一瞬。クルシユの警戒を促す声が上がると、即座にクルシユを始めとして、周囲にいた他の竜車でも異変を察して戦闘準備が行われる。

レムもまた肉体の負傷と倦怠感を押し退けて、自身の武装である鉄球を手にとって立ち上がり——舞い立つ血霧と木の藻屑。その向こうに、人影を見た。

どんな相手が、と警戒するレムの視界に、街道上に棒立ちする人物が見える。

無手。無防備。無警戒。そして、無慈悲で無邪気で無作為な悪意——

「——轢き殺せ!!」

クルシユが怒鳴り、御者台に片足をかけながら御者へ指示を飛ばす。それを聞いた騎士は首肯する代わりに手綱をうならせ、甲鳴く地竜を先頭に勢いを増した竜車の突貫は、直撃する物体を悉く肉片へ変える超重量の質量弾だ。

それは狙い変わらず、棒立ちする人物を真っ直ぐに捉える。相手は動く気配もない。そのまま接触し、細い体が衝撃に千切れて——。

「クルシユ様——!」

叫び、レムは真横にいたクルシユの腰を咄嗟に掴んで竜車を地面に横へと跳ねる。御者へ手を伸ばす時間は無いことは悟っており、レムはそれを悔やみながら地面へと足を着けた。

そして、次の瞬間。

「まったく、やめてほしいなあ。なんにもしてないのに轢き殺せだなんて、とてもじゃないけど人間のすることだとは思えない」

それはまるでピクニックの最中のような声音だった。平凡で、温厚で、欠片の悪意すら滲み出ることのないように思える、ぼんやりとした眩き。

それが衝突によって碎け散り、四散する竜車との接触場面でなかったとするならば、レムもここまでその異常性に戦慄することはなかったはずだ。

一見、なんの変哲もない人物だった。

細身の体つきに、長くも短くもなければ奇抜でもなく、ただ丁寧に整えられた白髪。黒を基調とした服装は特別華美でも貧相でもなく、面貌も目を引く特徴はない。至って平凡で、どこで見かけても数十秒もたたずに忘れてしまう。そんな凡庸な見た目の男だった。

だが事実、その男に接触した地竜は男を踏み殺そうと足を上げた体勢のまま肉体を半分に千切られており、御者の騎士も崩れきった竜車ごと粉碎されて木片と肉片の区別もつかない状態になっている。

そしてなにが恐ろしいかといえば、竜車が崩壊するその瞬間まで一

度たりとも目をそらさなかつたレムには、その男が本当の意味で『立っていた』だけなことが理解出来てしまったことだ。

地面に両の足をつける。それだけの行為が、超重量の竜車に真つ正面の衝突で打ち勝った。それだけで飽きたらず、物理法則を無視したかのようにその体には傷一つない。

「札を言おう、レム、助かった。だが……状況は改善されていないな」  
呆然とするレムの腕からクルシユが立ち上がる。命を散らした騎士の、もはや誰が誰だとすら認識もできない程粉々になった肉片に痛みしげに目を細めると、

「私の臣下をこれだけ無惨に殺しておいて、まさか無事で済むとは思ってしまい。……貴様、いったい何者だ」

爛々と輝く剣先を突き付けられ、それを男は数秒見詰めるとやがて納得したかのように頷き始める。

「なるほどなるほど。君は僕のことを知らないわけだ。といっても、僕は君のことを知っている。今や王都……いや、国中で君たちのことは話題に上っているからね。なにせ次代の王様候補だ。世情に疎い僕であっても、それが途方もなく大きなものを背負おうとしているってことぐらいは想像がつくさ」

「ぺらぺらと無駄口を——質問に答えろ、次は斬る」

「ひどい言い分だなあ。でも、それぐらい横柄でなきや国なんかとても背負えないのかもしれないよね。その感性は僕には欠片も理解できないけど、好き好んで王様なんて重すぎる責任がある立場を目指すって人の精神性なんてわかるはずもないか。ああ、理解できないからって否定したりしないよ。僕の方こそ、そんな横柄に振舞うようなつもりは微塵もない。僕は君と違って……」

長々と、クルシユの要求を無視して男がよく滑る舌を回し続ける。

「——次はないと、そう言った」

クルシユが冷徹に言い切り、彼女の腕が風の刃を振るい、

「——ストップです」

——止まった。同時、暴風が巻き荒れる。爆発的なエネルギーが至近距離で炸裂し、四散。髪を旗のようににはためかせながらもクルシユはその堅い面持ちを欠片も崩さない。

そしてレムは目を見開く。先程まで影も形も存在しなかったそこに、一人の少女がポツンと立っていたのだ。突如として現れた、戦場での異物。

だがそれだけが理由ではレムもクルシユも動じない。ならその二人が同時に硬直したのは何故か。

それは至極単純にして、全うにして——異常な理由。その少女は、クルシユの剣——その刃を無防備に受け止めながら、しかし微動だにしなかったからだ。不可思議な事に、少女の髪は風の影響を受けること無く、重力という一つの絶対的な物理法則に従って揺れ動く。

クルシユの手、その先で煌々と煌めく刃がギリリと牙を唸らせる。それと全く同質の色を持って、クルシユは瞳を少女へ向けた。

「……この短時間に二度も同じ問いをする事になるとは——貴様、一体何者だ」

クルシユはすぐさま硬直を振り払う。そして少女に動揺することなく、刃を横風ぎに払いながら、後ろに下がり騎士剣を構える。

「……私？ 私ですか？ ええと、そうですね。ここでは何て言えばいいのか……」

突然の乱入者。それに動揺を隠せないレムと、警戒を隠さないクルシユ。それをゆっくりと眺め、満足そうに目を瞬くと少女は口を開こうとする。

だがこの場にはもう一人、人間がいた。

「……君達さ、分かる？ 僕が気持ち良く喋ってたわけ。喋ってたよね。なのに、何？ 二人だけの世界です、って？ そう言うのは勝手にすればいいと思うよ。僕は温厚だ。だけど限度つてもものがある。分かるよね。人が喋ってるときに邪魔しちやいけません、話が終わるまで聞きましようって。習わなかったのかなあ。暗黙の了解ってやつ、知らないの？ 知らなかったから許されると思ってるの？ そう言う自分の無知さが、この世界で平々凡々に生きている僕みたいな人種を傷付け

るって分からないのかなあ。まあそこはいいよ。話を聞くかは個人の意思だ。だけどさ、勝手にそっちで話始めてはいお仕舞いつてのはさ、違うんじゃないかな？」

それを後ろ耳で聞き、クルシユとレムに背中を見せるように少女は反転。クルシユが軽く息を呑むのを背景に、そして少女は——深々と頭を下げた。

「確かに、そうですね……私の配慮が足りませんでした。どうぞ、お話を続けてください」

それを聞き、男は「あのさあ」と足を不機嫌そうに鳴らしながら口を開く。

「そう言う問題じゃなくてさあ。僕はさ、君達が僕の話の話を遮ったこと自体に怒りを覚えてるんだ。僕の、言いたくないけど、権利つてものを否定された事に対してさ。それを、『どうぞお話を続けてください』って。……君さ、僕をなめてるのかなあ。いや、なめてるからそう言う言葉が軽く出るんだろうね。しかもさ、君なんで許される前提で考えてるのかなあ。君が僕にした行為を許すか許さないかって、僕が正当に持つはずの権利だよ。いや、別に君の考えを否定しようって訳じゃない。そう考えるのは自由だよ。そんなことで僕も他人を貶めたりする程横柄じゃない。けどさあ、そう言う風な考えって、僕を見下してるから出てくるわけだよ。で、つまり君の考えってこう言える訳だ」

そして、男は深く息を吐いた。

「——僕の数少ない権利を、財産を、蔑ろにしてる、ってさ」

## ちよつとした攻防

ゾクリと、怖気が背筋に走る。世界が一瞬暗闇に満ちる。

その感覚を感じ取ったのは、レムとクルシュ。得体の知れない違和感と危機感。これは命の危機である——そう理性が警鐘を鳴らすのに、体が動かない。

男が、一步踏み込む。脱力しきつてきた腕が、下から上へと無造作に振られ、頬を撫でるような微風が巻き起こる。

直後、男の手が通りすぎた空間——世界が、地面が大気が時間が、全てが裂けた。

大地が割れる。空が甲鳴く。音が木霊する。そしてそれは瞬きの間に深々と頭を下げたままだった少女に迫り、その体を裂く幻想が写る——いや、あれがただの少女であるならそれは現実の物となるだろう。

そしてそれを確認する間もなく。

爆音と、そして撒き散らされたのは鮮血。何か堅いもの同士がぶつかり合う音が鳴り、同時。世界が嘆きをあげるように爆風が巻き起こる。

「——ッ！」

「クルシュ、様——」

立ち上がる土煙に、異次元の現象。目の前の男と少女の間に異様な何かが起こったのは確かな事で、だが、レムはクルシュに意識を向けざるを得なかった。

ポタポタと垂れる鮮血が、クルシュの傷付いた体が更に痛め付けられた事を示していた。肩から背中まで抜けた斬撃の跡の様な傷痕が酷く痛々しい。

咄嗟に駆け寄るが、クルシュはそれを片手で制止し、

「大丈夫だ、レム……痛むが、今はそれどころではないだろう」

「……はい」

今は、目の前の事象に向き合うのが先だ。クルシュが浅い傷の部分から包帯を引きちぎり、新たな傷口を固く縛るのを一瞥。軽い安堵の



吐息をもらす。そして慌てて鉄球を握り締め、前方を注視。そして土煙が晴れたそこに、

「申し訳ありません、どうやら私のせいでお二方を危険に巻き込んでしまいましたみたいで……この償いはいつか必ず」

無傷の少女が立っていた。背筋を伸ばし、その髪をゆらゆらと揺らす。クルシユが思わず息を飲む。

それは地面についた傷痕からして、恐らく少女は男の攻撃範囲にいたことは分かったから。そして、彼女がいなければ恐らく己が軽い裂傷ですまなかつたことも。

だが、それに反して彼女は全くの無傷。あまりの異様な現象の連発に、クルシユは思わず目頭を押さええなくなった。

「二つ聞きたい、貴様——貴殿は一体何をしにここに……」

だがその問いが形をなすことはなかった。瞬きの間に引き起こされたのは先程と同じ現象。

男が眉を潜め、掲げた右腕を再度振り下ろすのと、少女がクルシユの前に立つのは同時だった。

引き裂かれる様な風の音が鳴り響き、草木が根こそぎ吹き飛ばされる。少女の体を包み込むようにその暴威は世界を襲うが、暴風を全て少女が真っ正面から受け止めているため、クルシユたちに被害は無い。しかし正直、クルシユには何故そうするのか疑問だった。

「お二方、無事ですか」

「……ああ、だが」

チラリと警戒を崩さないレムを後ろに、クルシユは剣を固く握る。

——何が起こっているのか分からない。男が『何か』をして、それを少女が『何か』で受け止めている。理解出来るのはその程度。レムが恐ろしい顔立ちを崩さないのも、クルシユが剣を握るのも全てが得も言われぬ『異常』ゆえ。

そして、再度問いを投げ掛けようとし、

「……あのさあ」

「はい、何でしようっ？」

男は少女の言葉にピクリと眉を震わせる。そして、深く息を吸うと

——堰の切れた濁流のように言葉を吐き出し始めた。

「——あのさあ！なんなのかなあ君は！僕は君に攻撃しただろ?!おとなしく受けなよ!!君の犯した罪をそれだけで許してあげようって僕は言ってるんだ！人の尊厳も無く逃げ惑って、恥ずかしくないのかなあ?!」

「……いえ、私は別に避けても逃げてもいませんが」

「そう言う冗談はいいからさあ！さっさと黙って突っ立っててくれよ！それにさっさから僕を無視して後ろの二人とばかり話してさあ！さつき言つたはずだよ、人の話を聞きましようってさあ！それとも君は人を無視して、貶めることしか習って来なかったのかい?!それならしょうがない?!そんなわけないだろう?!もつと他人を思いやれ！他人の立場に立てよ！そんなんだからこの現状に満足して、満ちている僕に対してそんな態度をとれるんだよ！」

「……」

「今度はだんまりかい?!会話すらしたくないって?!なんだよ君は！」

支離滅裂な男の発言に目眩がしてきた少女は、己を落ち着かせようと一瞬力を抜き——次の瞬間、

「——っ」

巻き起こったそれは先ほどと全く同じ現象。だが、違うことがあった。

一つ。少女が知らず知らずの内に油断していたこと。

二つ。男の能力をほとんど知らないにも関わらず、それを追及しなかったこと。

そして、それらを包括的に含んだ要因の結果——少女が吹き飛ぶ。目を見開き踏ん張ろうとするが、四の五の言う間もなく、男から放たれた『何か』にその肉体は過剰な力を受け、遙か彼方へ吹き飛んだ。轟音と爆風が吹き荒れ、少女がいた地点を蹂躪する。

そして一拍おいて、男はゆっくりと口を開いた。

「……は、はは——そうだよ！そうだよ！僕の力に勝てる奴なんかいるわけないって分かってたさ！ははは——ああ、どうせアイツに元々

勝ち目なんて無かったんだ。さつさとおとなしく降参してたら良かったのにねえ。全く、理解しがたいよ……いや、僕みたいな真つ当な人間を貶める異常者には分かる筈もないのかな」

そして一頻り笑うと、男が踏み込みながら正面を向く。

「——それで、都合の良い盾の無くなった君達はどうするのかなあ」

「……何が——いや、レム」

「はい、クルシユ様」

鉄球を握り、目の前を向く。クルシユの構えを見て、その考えを読み取ったレムは余計なことはいらないとばかりに一步引いた。

男はそれを見、肩を竦め、

「はあ……これだからすぐに暴力に訴えようとする異常者は困るんだ。対話って言う選択を取ろうとは欠片も思わないのかなあ。おまけに、こう言う輩に限って自分の力に変な自信を持つてるから手の出しようがない」

「戯れ言を……これまでの貴様の暴挙を見て、私がそのような選択が取るんでも思っているのか」

「ほら。他人の話を聞かない、自分が正しいと思いついで容易くそれを他の人間にぶつける。誰がどう思おうかなんて知ったこっちゃない。典型的な自分の力に絶対の自信を持つてる異常者だ。そんなんだから、謙虚で満たされる事を知っていて、そして誰よりも平凡に生きている僕に負けるんだよ」

そして、クルシユは軽く息を吸い、

「——貴様に言われる筋合いはない」

かの『白鯨』。その強靱な皮膚を切り裂き、膨大な質量の塊たるそれを討伐するのに貢献したその一太刀が放たれた。

### 三人

「ああ困ったね。困ったな、困ったよ」

彼女は首を傾げていた。ぼんやりとではなく、ハッキリと。有耶無耶ではなく、理路整然と。

「君は《強欲》。僕の下。僕の為。僕の物——ああ、《暴食》も。《嫉妬》も《怠惰》も《色欲》も。《憤怒》も《傲慢》も全てが全て……下であるべき。あるべきだ、あるべきなんだよ」

言葉が響く。

「不思議だね、不思議だよ。不思議で不可思議曖昧な。無知蒙昧で朦朧な。……ああ、恨めしい。恨めしいな、恨めしいよ」

そして彼女は微笑んだ。

「——まあいいか。いいよ、いいね。僕は《高慢》。上で下で僕が頂点。一切合切僕が上。做う全ては僕の下——ああ、滑稽だ。滑稽だね、滑稽だよ」

そして彼女は——戻った。



「——ぐっ！」

「ああ、申し訳ない。淑女を苦しませるつもりはないんだ。本来なら僕だって暴力は好まない。ほら、『闘争心』って言うのかな。そう言う、暴力的で排他的で無意味な物を僕は生憎持っていないんだ。だからさあ、君たちが僕の権利を侵害して弄ばなければ僕だってこんなことせずにすんだんだよ。そう考えるとこれって自業自得って言えるんじゃないかなあ」

直撃ではなくとも、足場である地面を削られたクルシユは崩れ落ちる。後ろに控えるレムは丁寧に攻撃を避けながらこちらを観察しているが、好都合なことに男はそちらへ積極的に攻撃を仕掛けない。

立ち上がりながら考える。

三振り。それがクルシユが避けることの出来た攻撃の全てだった。

既に吹き荒れる暴風は男に当たっている。だが、それら全てがまるで意味を成さない。それこそ、そう。そよ風に当たっているかのよう——いやそれ以下とすら。

突然現れた少女がいたからこそ、『避ける』と言う選択が出来た。男が手を振るった範囲が致死の領域だと理解できた。

しかし、そうすると疑問が残る。

「——何故、貴様の攻撃をあの子は受けることが出来たのか」

ピクリと、男の眉が震える。ゆっくりと息を吐くと、男はやれやれと言うように肩をすくませた。

「そう言う挑発は聞き飽きてるんだ。ほら、何て言うのかなあ。普通に生きていると、むしろこう言う僕みたいな上流でも下流でもない存在を貶める事が好きな人間が不思議と多くいることを」

「何か、理由があるはずだ。貴様もそうは思わないか？」

鮮血が肩から滲み出る。既に傷は抑えきれない領域まで達していた。

だが、それを獰猛な笑み一つで踏み越えると、クルシユは爛々と煌めく瞳で男を見据える。

「——そして、私達は既にそれへの答えへのヒントを得ている」

「……おもしろい事を言うなあ。心の底からそんな風に思っているなら驚きだ。自分の力に過剰な信頼を抱いている君達だからこそ出てくる言葉だよ。ああ、君達が勝手にそう考えるのを咎めてる訳じゃないさ。当たり前前に出来る権利で、自由だ。そこは否定しない。寧ろそんな君達を両手を挙げて称賛して、認めようじゃあないか」

そして、よく回る舌を男が収めたタイミングで。クルシユは、叫ぶ。

「レム!!」

「はい、クルシユ様!!」

白い角が額から突き出し、大気に満ちるマナをかき集めてレムに活力を与える。

全身に力がみなぎり、鉄球を握る腕が蠕動し、氷柱が今か今かと呼び声を待つ。

「——ふっ」

そして、同時にクルシュが放った一撃は、その並々ならぬ威力を十全に発揮し、紛うことなく棒立ちの男の——足元を射抜いた。

「——っ！」

そして驚愕に目を見開く男を背にレムはそちらへ鉄球を投げ捨てながら、駆け寄ってきたクルシュを抱える。

「大丈夫ですか、クルシュ様！」

「ああ、問題ない——ッ?!」

「——痛むと思いますが、申し訳ありません」

予期せぬ痛みが走ったのか、目の前を見詰めながら目を見開くクルシュを見なかったことに。早口でクルシュを抱え終わると、男を背に駆け出そうと——

「——あア、まったく……いつくら食べても喰い足りないッ！ これだから俺たちは生きることをやめられないんだ。食って、食んで、噛んで、齧って、喰らって、喰らいついて、噛み千切って、噛み砕いて、舐めて、啜って、吸って、舐め尽くして、しゃぶり尽くして、暴飲！ 暴食！ あア——ゴチソウサマでしたッ！」

突然、目の前から届いたのは甲高い成長期の男性の声。咄嗟に顔をあげる。

そして眼前、停車した竜車の群れの中心で、背をそらして哄笑する血塗れの人物の存在を捉えた。

濃い茶色の髪を膝下まで伸ばした、背丈の低い少年だ。身長はレムと同じか低いぐらいで、年齢も二つか三つ下——屋敷の近くの村の子どもたちより、ほんの少しだけ年上なぐらいに思える。

その長い髪の下、細い体をボロキレのような薄汚れた布でくるんだだけの服装をしており、かすかに覗く肌色は至るところが血で赤く染まっている。

もちろん彼自身の血ではなく、その足下に倒れる騎士たちのものに相違ない。

前方の敵と相対するクルシュとレムとはまた別に、騎士たちも後方

に出現した敵と対峙していたのだ。そしてその結果は、クルシユとレムにその戦闘の気配を悟らせることすらできずに敗れ去るというものだった。

そこで、唐突に乾いた音が鳴る。後ろで、男が欠片も汚れてもいない服を叩いていた。その顔は酷く剣呑な物。

「貴様らは……」

腕の中のクルシユが声を震わせ、レムは前と後ろ——それぞれの相手を視界に入れられる位置にまで後ずさる。クルシユから滴る血が街道に僅かに朱を刻み、恐怖に追い詰められる彼女を嘲笑うように空気が真っ白に冷え込んでいく。

その質問を投げかけられて、男と少年は互いに顔を見合わせた。

それから示し合わせたように頷き合うと、男はどこまでもこちらを見下すような笑みを、少年はひどく親しげで暴力的で悪魔のような笑みを作り、名乗った。

「魔女教大罪司教『強欲』担当、レグルス・コルニアス」

「魔女教大罪司教『暴食』担当、ライ・バテンカイトス」

「——大罪統括『高慢』担当、セツト・グラーズ」

そして、異物が入り込んだ。

## 『名前』

「名前と言うのは、大きな意味を持つものさ。持つんだ、持つものなんだよ」

椅子に座り、行き交う影を傍目に、彼女はテラスで言葉を紡ぐ。一本一本丹念に練りだされた言葉は、確かに世界を侵食していた。

「だから僕は僕足り得ると、得るんだと。得られるんだと」

そして突然彼女は、周りの影のことなど気にも止めず立ち上がった。両手を広げ、彼女は自身の存在を強調せんと口を開く。

「高らかに叫ぶ。叫んで、叫ぼうじゃないかー」

そして、少女は宣言する。

「僕の名前は——!!」

それは世界への傷痕。決して取れぬ懐古の残滓。故に、それは——。



凍りついたような雰囲気が辺り一帯を包んでいた。その空気の中、最初に動き出したのはレグルス。

スツと息を吸う間もなく、レグルスはゆつくりと口を開いた。

「……『高慢』？聞いた覚えがないんだけど、勝手に自分で妄想にふけて、そう、言うなれば妄言は言わない方がいいと思うよ？しかも、なんだって？『統括』？まるで僕らを纏めあげるみたいじゃないか。何て言うのかな、勝手にそう言う風に考えるのは良いけどさあ。自分が上だと言う酷く独善的な思考で君はこれまで生きていたって言うのかい？それは同情に値する境遇かも知れないけどさ、だからってそれを僕達にぶつけないでくれるかなあ。ここにいる全員が君の事を疎んで、嫌って、否定してるんだ。理解してないの？してないから許されるっていうのは、本人だけが考える幻想だよ。他人の迷惑



を、気持ちを欠片も考えない最低最悪の人間だ」

捲し立てるように一息に放たれたのは濁流のような拒絶の嵐。唐突に語られたそれに、だが少女は、セツトは視線を向けない。

「口の悪い者はユゴスとも呼びますが……それはさておき。以後、お見知りおきを」

一礼。くるりと、貴族の令嬢を思わせる動作でそれをする一人の少女。余りの違和感に、クルシユはレムに抱えられたまま呟くように疑問を呈する。

「貴殿は……敵か？」

それに浮かぶような微笑みでセツトは返す。レムが警戒の姿勢を崩さないことすら、それはまるで気に留めていないようであった。艶やかな唇が震える。

「ふむ、それは」

「……あのさあ」

ピタリと開こうとした口が止まる。まるで、今思い出した、というようにセツトは大罪司教二人へと向き直った。

レグルスの隣でバテンカイトスはまるで品定めをするかのように舌舐めずりをしていた。

「二回だ」

「はい」

変わらぬ笑みで、セツトはレグルスを捉えた。それに青筋をたてた様相を思い起こさせる声で、レグルスは再び口を開く。

「二回、君は僕の言葉を無視して、遮った。言ったよね？ 確かに、最初は許したよ？ 僕は寛容だ。そこらのちっぽけな大義やら名誉やらで他人に目くじらをたてる人間なんかと一緒にして貰ったら困る。だけどさあ！ 僕がいくら心が広いからってそれには限度がある。分かるよね。こんな僕でも、普通の人間だ。これだけ僕の名誉と気分を汚されて、はいそうですね、なんて言える訳ないだろう？ それぐらい君も分かってる筈だ！

つまり！ 君は誰にでもある、『自由に喋る』って言う権利を無視してるんだ！」

「なるほど」

「そう言う態度が！他人を汚してると言うんだよ！分かんないのかなあ?!他人を人と思わない！他人の主張を理解しようとするらしい！ほら！どこまでも傲慢な君の考えが透けて見える！」

余りにも淡々とした返答は、確かに人を軽んじているとも捉えらるだろう。丁寧に戻される、中身のない返答。それはレグルスの不満を溜めるには十分過ぎた。

激昂したレグルスが腕を振り上げ――

「――そして、申し訳ありません」

――ひゅ、と風が高鳴った。暴風と呼ぶには、余りにも儂げな風だった。軟風と呼ぶには、ちよつとだけ力強い風だった。

そして、全ては終わっていた。

「……え？」

レムの口から漏れたのは、余りにも自然な驚愕の声。何の前兆もなかったのだ。何の前触れも見えなかったのだ。

仮にも鬼であるレムの、聴覚にも嗅覚にも、まるで今の状況こそが正であるとはかりに『正常』を伝えてくる。だが、視界に入る風景はそれを受け入れるには少しだけ異常が過ぎた。

セットの前から、大罪司教が消えていた。まがりにもなにも、その脅威を直接味わったレムとクルシュだからこそ一瞬止まらざるをえなかった。

二人の男が、その暴虐の痕だけ残り、その姿を消していたのだ。レムの腕の中、震える声がゆっくりと響く。

クルシュですら警戒を隠せなかった。敢えて見せるでもなく押し隠すでもなく、ただただ純粹に言葉に滲むのは驚愕と、そして純然たる恐怖。それを持って、彼女は『不明』と言う目の前の脅威へ向かい言葉を掛ける。

「……言葉を变えて、もう一度問おう。貴殿は一体、なんだ」

そして、セツトはレムへと向きながら、ふわりと一度微笑んだ。

「——ふふ、それは乙女の秘密です」